

台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に

関する一考察 (三) — 現地調査における現状と課題 —

安部 力

はじめに

本稿は、前二稿(1)に続いて、現代の台湾(中華民国)の人々、特にカトリック・キリスト教信者(以下「天主教徒」とする)の持つ「宗教意識」を探ることを目的として行った、現地調査の総括及び今後の課題に関する報告である。

まず、前稿作成以降に行った現地調査で得た新しい知見について、これまでに本テーマに関して行った現地調査と比較・関連づけながら紹介したい。

一、「本地化」の状況について(2)

2010年8月と2011年3月に行った現地調査では台北市内の天主教系教堂を中心に訪問し、台北市内の天主教徒の実情について伺った。(文章中に出てくる各天主堂に振られている番号は本文注末に掲げている、訪問した各天主堂(教会)の番号に対応している。)

まず右下の写真上は台北市通化街にある「12 聖玫瑰堂」に付設されている信光幼稚園であるが、この教会の謝又雪女史(天主教徒)に話を伺えた。「この教会に集まる信者は300人ほどで、幼稚園児は150人いるが、その中の天主教徒は10人に満たない」とのことであった。台北市が属す台北総教区全体では8万6千人ほどの信者がいるが(3)、調査で訪れた教会付設の幼稚園で信者の子供ばかり(もしくは子供が洗礼を受けるなどして信者である、という幼稚園は多くなかった(4)。この天主堂を訪問して目についたのは、右下の写真下にある「揭示板」である。一見、普通の信者向け揭示板のようであるが、屋根が「中華風」の造りになっている。これを単純に「建築者の好み」であると片付けることは可能であるが、それ故に「意識」を反映していると言える。天主堂の造りと比較すると唐突な印象は否めない。このような例は今回の訪問調査においていくつも見られた。



12 聖玫瑰堂付設信光幼稚園入り口



同天主堂入り口横揭示板

例えば、左の写真上は台湾の「天主教研究」の中心である輔仁大学構内にある「マリアを祀った建物」であるが、その屋根(造り)はやはり「中華風」である。左の写真下の「台北総主教公署(台北地区の総主教が教会事務を行う場所)」の屋根もまた同じ造りである。特に「総主教公署」の屋根はこのような形状である必要はないはずであるが、これは「台湾」を意識して造られていると言って良いであろう。



51 輔仁大学構内



33 台北総主教公署

このような「建築物」そのものの以外に、教堂内に安置されているイエス像やマリア像を祀る「祭壇」等にも同様の傾向が見られる。次頁の写真はそれぞれ上が「5 聖女小徳蘭朝聖地」の教堂内にある聖母子像の祭壇であり、下が「19 聖道明堂」の教堂内にあるイエス像の祭壇である。どちらにも「中華風」の屋根が用いられていることが分かる。このような例を見ると、台湾におけるキリスト教

この右の写真上の画像が「天使」であること(教会に貼られている翼のある絵は理解しやすいが、ミカエルなのかガブリエルなのか等は不明である。しかし書かれている文字から「護符」であることを考えれば、大天使ミカエルである可能性は高い。それは「25 永春天主堂」には右の写真下のような「護符」が貼られてあったからである。右下の画像は大天使ミカエルのアイコンに由来した絵であるため、このような画像が「キリスト教のミカエルを描いた護符である」ことは容易に看取できるが、右上のように「中華風」にアレンジされると、一見して「何を描いた護符」なのか理解しにくい。しかしそれでも右上のようなアレンジを産む土壌が台湾にあることの一例として捉えることは可能であろう。

このような「画像」に関する「本地化」(中華風アレンジ)や、それが台湾で信仰されている「媽祖」や「註生娘娘」などと習合する印象を与える例については、



5 聖女小徳蘭朝聖地教堂門柱



25 永春天主堂門柱

(特にカトリック(5)が「本地化」もしくは「習合」の傾向を見せていると言えるのではないだろうか。無論、これらは「見かけ上」の問題であるが、聖女小徳蘭朝聖地教堂の門柱には左の写真上のような「画像」も貼られていた。



5 聖女小徳蘭朝聖地教堂内



19 聖道明堂教堂内



聖保祿孝女会付設上智文化事業文物
供給社で「土産物」として売られて
いた木製のマリア像とヨセフ像

これらのような聖母子像やマリア像ばかりであれば、私の関心もここで断念せざるを得ない。しかし、今回の調査では左の写真のような物を手に入れることが



27 文徳女子高級中学のマリア像



21 聖若望鮑思高堂内の聖母子像

既に「前稿(二)」で言及した。それらに今回得た知見を加えておきたい。

「27 聖母升天堂」を訪問した際、教堂の神父さんに、道路を挟んで向かいにある文徳女子高級中学を紹介された。この学校は元々「天主教耶穌聖嬰方濟修女会(Franciscan Sisters of the Holy Infant Jesus)」が創建したもので、カトリックのフランシスコ会系の学校である。(ここでは程淑貞校長先生に学校の来歴や状況、そして現在の台湾における天主教徒について話を伺えた。この学校については後述するが、私が台湾のカトリック教会に見られるマリア像について尋ねると、左の写真上のようなマリア像を見せて下さった。このようなマリア像が、一般的に我々が目にすることの多いマリア像であり、それは左の写真下(21 聖若望鮑思高(ヨハン・ボスコ)堂)にもあるような「純粹に西洋風」のマリア像である。



53 台南市中華聖母主
教座堂の庭内に建つ
聖母子像

このような中華風にアレンジされた聖母子像は「お土産」に限らず、台南市の「53 中華聖母主教座堂」にも実際に左の写真のような像が安置されていた(6)。



台北市の道教廟で
ある保安宮の註生
娘娘像

これも同じく聖保禄孝女会文物供應社で売られていた物であるが、これは台湾で言う所の道教系の神である「註生娘娘」に非常によく似ている(左の写真)。



土産物として売ら
れていた木製の聖
母子像

できた。この二つの像はお土産品であるが、売られている場所が「聖保禄孝女会付設上智文化事業文物供應社」というキリスト教関係物品の販売所でなければ、すぐに「マリアとヨセフ」とは気付けないであろう。特にマリア像は「合掌してお祈りを捧げている女性の像」という認識を出さないのではないだろうか。これが、前頁の「27 文徳女子高級中学」で見せて頂いたマリア像(特に向かつて右側のマリア像)と同じモチーフであることを連想することはキリスト教徒でなければ難しいように思うが、それほどアレンジが進んでいると言える。更にこの木製のお土産品シリーズには左の写真のような「聖母子像」もある。

ここで取り上げる事例は、先にも紹介した「文徳女子高級中学」である。この学校を訪問したのは全くの偶然であり、「27 聖母升天堂」の神父さんに紹介されなければ興味を示すこともなかったであろう。「27 聖母升天堂」の全景写真を撮るためにこの学校の門前を右往左往はしていたが、興味を惹かれることはなく、何より「天主教系の学校」とは思いも寄らなかった。それはまず、この学校が「文徳」という名前の学校だったことによる。この聖母升天堂の隣には「方濟中学」があるが、これが一見して「フランシスコ会系の学校」であることは、天主教の研究であれば察しはつく。しかし「文徳」と聞いてそれがキリスト教と即座に繋がることは非常に難しいように思う。無論私の不勉強による点も大きいですが、台湾の

二、天主教(施設)関係者の意識

このように、こと「聖母子像」に関しては現在の台湾では非常に「本地化」されている印象を受ける(7)。

以上が「聖マリア像」及び「聖母子像」に関して今回の現地調査で得た知見である。前稿と重複する部分もあるが、宗教が「根付いていく(伸張する)」過程で見られる状況が、現在の台湾で意識する・しないに関わらず、進行していることは看取できよう。これらがそのまま「天主教徒の意識を表すもの」とするには拙速であろうが、少なくとも「外来の宗教が受け入れられていくために必要な過程」を示す物として理解することは可能であろう。これ以外に、今回の訪問調査では次のような事例もあつたので、考察を交えて紹介したい。



「Q版聖像系列」の中
華聖母子



Q版聖像系列のパンフ
レット

この3枚の写真を見る限り、やはり台湾におけるキリスト教の図像が台湾風にアレンジされていることは確かであろう。このような「聖母子像」は天主教徒向けのお土産に限らず、一般向けの左の写真のような玩具にも見られる。

学校名が、よくそうなっているように、一面している通りの名前から採っているだろう(左の写真上)と推測するのが普通であろうし、建物自体にもあまり「キリスト教」を感じさせるものが見当たらなかったからである(左の写真下)。



文徳女子高級中学校の門前にある通りの名前を示す交通標識



文徳女子高級中学校の校舍

このような認識であったため、神父に紹介頂いた時には、自分の不明を恥じる一方で、名前の由来を是非聞いてみたいという興味を持つこともできた。この学校では、先述の通り程淑貞校長先生にお話を伺うことができたので、この校名の由来を尋ねてみた。以下はその内容である。

「元々、この学校は 1966 年に天主教耶穌聖嬰方濟(フランシスコ)修女会によって、「方濟中学女子部」として創設されました。その後、1969 年に「高中部(高校にあたる)」を加え、1971 年に校名を「文徳女子高級中学校」としました。校名は聖ポナベンチュラ(Bonaventura)から頂き、「文徳」としました。校訓は「宣文崇徳、效賢仰聖、品德第一、學業為重」としています。学生数は約 1200 名ですが、そのうち天主教徒である学生は 20 名ほどです。教員も半分は信者ですが、もう半分は本校の教育理念に賛同した人々です。」

この話を伺った際、まず思ったのは日本のカトリック系の学校と似た状況だ、ということである。日本では学生が信者である割合はより少ないが、教員も信者であることは少ない。この時点では「文徳」が聖ポナベンチュラから来たことを知らなかったことが大変失礼且つ恥ずかしかったため、これ以上、校名について尋ねることはしなかった。しかし、その後調べてみた事から、いくつかの疑問が生じた。それは、まず、現在の「台湾天主教手冊」(2010 年)ではこの文徳女子高級中学校は英名が「St. Francis Girls' High School」となっており、創設当初のままである。これは「手冊」の方のミスである可能性もあるが、「文徳」と聖

ポナベンチュラとのつながりは示されていない。ただ、聖ポナベンチュラはトマス・アクイナスと並ぶ中世スコラ学の代表的神学者であり、「熾天使的博士」とも呼ばれるフランシスコ会の総会長をも務めた人物である(8)。この来歴からすれば、元々「フランシスコ会」が創設した学校の名前にそのポナベンチュラの名前を冠することは違和感がない。しかし、本来、ポナベンチュラを「漢字表記」する際には「波拿文都拉」とすることが一般的なのである(9)。この「訳名」と「文徳」を比較すると「文都」の部分を使って「文徳」とした可能性はあるし、「ポナベンチュラ」を略称する場合に「文徳」と台湾で言っているのかもしれない。この点については、当時真相を尋ねるまでに到らなかったため、今後の課題である。しかし、それでも何故「文徳」という名前に変更したのか。現段階での推測が許されるのであれば、私は次のように考える。

「天主教会系の学校であることを印象づけるのであれば、「方濟」という校名を残す方が、台湾においても「方濟会系」の天主堂も多いため、知名度は高いはずである。事実、向かいにあるフランシスコ会系の男子校は「方濟中学」としている。しかし、一方で「門戸を広く開放する」という点から考えれば、より一般的な校名を考えた方がよい。簡単に言えば「良い言葉・文字」を使った校名である。そこで通りの名前にもある「文徳」に着目した。これは校訓でもある「宣文崇徳」(左の写真上)とも合致する上、場所も「文徳路」と覚えやすい。そして「ポナベンチュラ」の訳名である「波拿文都拉」に結びつけ易くもある。」

このような見方がかなり穿っていることは自覚しているが、私自身どうしても「文徳」と「ポナベンチュラ」が結びつかなかったのである。実際、この文徳女子高級中学校構内にある「聖ポナベンチュラ」の像(左の写真下)を見てもその訳名とのつながりがしつくり来なかった。



「宣文崇徳」の校訓を示す門柱。左奥に見える十字架のある建物が 27 聖母升天堂



校内にある聖文徳の像

しかし見方を変えて、これが台湾における天主教会系の学校が、一般の台湾の人々

に向けて学校を記憶してもらったための「配慮・工夫」であると考えた場合、この「文徳」という名は非常に興味深いものになる。それは「西洋」のものである天主教を台湾の「漢字文化」に翻訳し、そのことによって「浸透」を図る、ということまで見てきた「本地化」の一例と捉え直すことも可能だからである。「聖波拿文都拉女子学校」では恐らく良い意味で記憶には残りにくいのではないだろうか。それよりは「文徳路」にある「宣文崇徳」が校訓の「文徳女子学校」という印象の方が記憶に残るのではないだろうか。あくまでも推測の域を出ないが、「文徳」に校名を変更する際に「ボナベンチュラ」と結びつける苦心がそこにはあったのではないだろうか。

このような様々な天主教の「現地への浸透(本地化)」の努力があったからこそ、次のような印象を与えることができているようにも思う。それは天主教系の幼稚園を管理する園長さんの話である。これは「9 聖三堂付設幼稚園」を訪問した際、園長である王尹盈さんに伺ったお話である。天主教徒ではないが、「天主教」の幼稚園で園長を務める一台湾人の「宗教意識」を表すインタビューとして示唆に富む内容を持っていると考えている。

「聖三堂(幼稚園)では、信・望・愛の三つの徳をモットーとしています。3 月 11 日の東日本大震災の際には、園児も募金をしてくれました。元々、この教会は 50 年ほど前にオランダから神父さんが布教を目的に台北へやってきて、教会建設用の土地を購入するためにオランダで募金をし、建てられたものです。現在、平日は朝 7 時半からミサを行っています。高齢の信者さんが 10 人程度お見えになります。幼稚園児は全部で 130 人ほど居ますが、天主教信者は 4 人です。幼稚園の授業の一環として天主教の教理を教える時間がありますが、入信を強制してはいません。教理を「理解」した上で「自分で信仰を選ぶ」ことを重視しています。私(園長先生)自身は、仏教徒ですし、16 才の頃、この幼稚園でアルバイトを始めたことがきっかけとなって今に到っています。仏教徒だからと言って何かの不利を蒙ったり嫌な思いをしたことはありません。また、これまでに入信を奨められたこともありますが、両親が生きている間は改宗するつもりはありません。両親は本省人(注:一般的に 1945 年に中華民国が復帰する以前から台湾に居住していた人々を指す。福建省出身の人々が多い)ですので、仏教と媽祖を信仰しています(注:元々媽祖は「道教」の神であるが、台湾では共存して祀られることも多い)。台湾での天主教は外来

宗教ということもあって少数派です。台湾にはやはり台湾の宗教があります。

しかし、私が長年付き合ってきた天主教信者の方々のうち、特に高齢の方々にも大変な人格者がいらつしやいますので、天主教の教えによっても「良き人(好人)」と表現されていました(注:「は育成されるのだと分かりました。普遍的な倫理性という点ではどちらの宗教によっても問題は無く(「都没有問題」)、「実践の上で良き人」であることが何よりも大切なのだと思います。もちろん、それぞれの宗教が持つ倫理の基礎・出発点は違いますが、「精神的な拠り所」を決めるのは「フィーリング」という部分が大きいと思います。ただ、「台湾人」としては祖先から受け継いでいる(「自分の」)「根」を考えるために(「親への」)「孝行」は決して忘れてはいけないと思います。それは天主教徒であっても同じで、「親(の恩)」はいつも心に持っておくべきだと思います。そのため分かりませんが、台北市内には多くの教会がありながら、神父のなり手がいません。仏教でも状況は同じようで、それは「妻帯」が禁止されているために「子供」が持てず、「親から子供へ繋がる根」が切れてしまうからではないでしょうか。今後難しい問題になるかもしれません。」(内容は筆者が適宜要約してある。)

ここでは、天主教は外来の宗教でありながらも、「良き人(台湾人)」を形成する上で有益であることが述べられており、台湾の「宗教的寛容」がよく表れている。これをどう評価するかは歴史が判断するであろうが、少なくとも現段階で可能な「個人」の姿勢としては見るべき点があるのではないだろうか。台湾ではこのような「宗教的寛容」や「宗教間対話」の書籍も多く、「融和的」傾向を強く感じる(10)。それ故、「本地化」傾向を感じることも多いのであろう。無論それだけでは乗り越えられない問題が大きいことも事実である。それは参考資料として訳出した『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』に事細かに「異宗教への対応」が説明されていることからも看取でき、それ故、園長先生も「親への孝行」に言及されて、その「表れ」としての儀礼(一端としての「葬礼」)の意義も問われてくるのである。このような「実践」面だけでなく、教義的な垣根はより根が深く解決困難である。そのような垣根をどうやって取り除き超えていくのか。この点で、台湾における「宗教的寛容」が真の意味で今後問われるであろうし、それは我々自身に問われることでもある。つまり、「実践」を重んじて「共通性(普遍性)」を見出していくのか、「原理原則」(神学的・教理的に超えられない壁)を残したまま新しい解決方法を見出していくのか。

現代の台湾における「宗教的寛容」に見られる特徴は、歴史的に東アジアが抱えてきた「文化的衝突」への重要な試金石となるはずであり、筆者の関心としてあるイエズス会士による所謂「典札問題」の根本的課題とその解決も現代に引き継がれている証左であるのではないか、と考えている。

おわりに

以上、本テーマに関する現地調査で得た知見を紹介してきたが、「本地化」が進む現状を素描できたのではないだろうか。台湾にとって、ひいては「東アジア地域」における天主教とはどのような在り方をしているのか、またすべきなのか。明末に東アジアに到来したキリスト教宣教師達が目指したもの。それは恐らく現在まで、そして今後も「東洋と西洋」という括りで見ると一つの大きな問題になるであろう。元々は「典札問題」によって解決を見なかった、言い換えれば先送りされた問題を考えるために始めた調査であったが、調査者自身も、キリスト教の状況そのものも未だ途上であることを痛感した。しかしだからこそ私なりではあるが「現在の過程」を記録し、考察することに意味があるように思う。解決策や解答を明示できる問題ではないだろうが、今後もそれを見据えて調査・考察を続けていきたい。

《注》

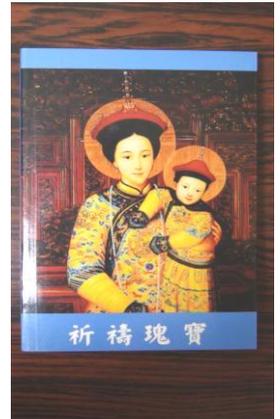
(1) 本テーマに関連した拙稿は次の通りである。「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(一)―祖先祭祀をめぐる問題―」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第41号 平成20年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(二)―「天后聖母」について―」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第42号 平成21年)。
 (2) 「本地化」とは中国や台湾等「東アジア」のキリスト教を語る際、「土着化」「本地化」とも呼ばれる、「キリスト教がそれを受容する民族としての個性をもつこと」「その民族の文化。社会の中に根を下ろすこと」として用いられる(山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社、2006年、4頁)。ここでは「台湾の風俗や習慣を反映した特徴を持つ(アレンジされた)もの」として使用している。

(3) 2009年の集計によれば、台北総教区(台北市・基隆市・台北縣・宜蘭縣)の信者数は8万6125人であり、台湾全体では29万9938人となっている(2009年台湾地区天主教会教務統計表『台灣天主教手冊』台灣地區主教團秘書處編譯、天主教教務協進會出版社、2010年2月)。(但し、「内政統計年報2009年」では天主教徒は「17万7641」となっている。)

(4) ただし、「1聖母無原罪主教座堂」を訪問した際は、天主堂内を參觀するのに「信者であるかどうか」を尋ねられ、付設の幼稚園の園児達も多くが「信者である」と伺った。現在の台湾で、台湾の人々がどのような契機で「入信」していくのか、その要因を探る一環として、教会付設の幼稚園での教育や幼稚園児に占める信者の数、天主教会系の幼稚園に子供を預ける理由などを分析することができれば、「台湾の人々の宗教意識」に迫ることができると考えているが、非常にデリケートな問題であるため、信頼関係の構築等、入念な準備が必要であろう。

(5) 台湾のカトリック教会を調査する過程で、プロテスタント系(特に長老教会系)の教会を訪問したこともある。「信者」の方々の対応はほぼカトリックと同じであったが、教会内において「イエス像」や「マリア像」はなく、「画像」に関してはまったく「本地化」の傾向は見られなかった。これはプロテスタント系の多くが「聖書のみ」を基本方針とし、「画像」を「偶像」として排しているからだと考えられる。その一方で、カトリックがその伸張過程において様々な習合を繰り返して来たことは既に様々に指摘されている(例えば、霜田美樹雄著『新装版 キリスト教は如何にしてローマに広まったか』(早稲田大学出版部、1997年)では、キリスト教がギリシア思想の影響を受けながらローマに達し、更にヨーロッパ全域に伸張する際に、様々な土着の信仰を包摂していたことが明らかにされている)。(6) この聖母子像については注1所掲の拙稿(二)で触れているので参照されたい。また、聖母子の画像についても前稿(二)の『中華聖母敬禮史話』を取り上げた際に触れているので参照されたい。

(7) 本稿は台湾における「本地化」がテーマであるが、例えば香港で出版された書籍には次頁の写真のような表紙が描かれている。このような例をみれば、香港と台湾の状況は近い可能性がある。その他、各地域の特色を反映した聖母子の画像がイスラエルのナザレにある「受胎告知教会」にあることを知った。
 (http://travel.jp/overseas/area/middle_east/israel/the_other_cities_of_israel/travelogue/10043902/)



この「祈禱瑰寶」(小清泉編輯、香港清泉出版社、2005年)の表紙に見える絵は、香港出身の朱家駒(1960年生)の画家の作品であり、モチーフは「清朝」の恐らく皇后とその息子であるが、古い物ではない。

(8) 『新カトリック大事典』第4巻、学校法人上智学院著、研究社、2009年、683頁「ボナヴェントゥラ」

(9) 『基督教詞典』(基督教詞典編写組編、北京語言学院出版社、1994年、712頁「外文譯名对照表」)ただし、一概に「校名の漢字表記」が「英名」と対応しているかと言え、そうではない例も多い。例えば「34徐匯耶穌會院」付設の「徐匯高級中学校」は「St. Ignatius High School」であるし、「44四湖遣使會院」付設の「文生中学」は「St. Vincent High School」である。後考を俟ちたい。

(10) 例えは『三字經与聖經 三十二講』(房志榮著、天主教之聲雜誌出版社、2005年)、『釈迦牟尼與耶穌基督』(田毓英著、光啓出版社、2000年)、『你的耶穌 我的佛陀』(陳世賢著、光啓文化事業、2007年)等が挙げられよう。

《これまでの調査で訪れた主な天主教系教堂及び施設一覧(2008~2011)》

【台北市内】

- ・ 1 聖母無原罪主教座堂 (103 台北市民生西路 245 號)
- ・ 2 救世主堂 (華山堂) (100 台北市忠孝東路一段 112 號)
- ・ 3 聖維雅納堂 (10073 台北市詔安街 236 號)
- ・ 4 耶穌救主堂 (108 台北市柳州街 41 號)
- ・ 5 聖女小德蘭朝聖地 (108 台北市興寧街 70 號)
- ・ 6 復活堂 (108 台北市大理街 175 巷 2 號)
- ・ 7 玫瑰聖母堂 (108 台北市萬大路 405 號)
- ・ 8 聖母顯靈聖牌堂 (10656 台北市延吉街 254 號)
- ・ 9 聖三堂 (及び付設幼稚園：11046 台北市松仁路 228 巷 15 號)
- ・ 10 聖家堂 (106 台北市新生南路二段 50 號)
- ・ 11 仁愛天主堂 (106 台北市仁愛路三段 34 巷 12 號)
- ・ 12 聖玫瑰堂 (106 台北市通化街 178 號)

- ・ 13 聖母聖心堂 (106 台北市和平東路二段 265 巷 9 號)
 - ・ 14 古亭耶穌聖心堂 (10089 台北市辛亥路一段 22 號)
 - ・ 15 聖若瑟堂 (100 台北市同安街 72 巷 19 號)
 - ・ 16 聖瑪竇堂 (104 台北市建國北路二段 64 巷 25 號)
 - ・ 17 長安天主堂 (104 台北市林森北路 73 號)
 - ・ 18 聖多福堂 (104 台北市中山北路三段 51 號)
 - ・ 19 聖道明堂 (104 台北市吉林路 378 號)
 - ・ 20 聖保祿天主堂 (104 台北市北安路 512 巷 1 號)
 - ・ 21 聖若望鮑思高堂 (105 台北市民生東路三段 123 號)
 - ・ 22 聖若瑟堂 (105 台北市八德路三段 158 巷 22 號)
 - ・ 23 中華之后堂 (105 台北市南京東路四段 133 巷 6 弄 9 號)
 - ・ 24 南京東路聖母 (105 台北市南京東路五段 352 號)
 - ・ 25 永春天主堂 (110 台北市松山路 465 巷 2 弄 4 號)
 - ・ 26 法蒂瑪聖母天主堂 (105 台北市富錦街 442-2 號 1 樓) (廢墟)
 - ・ 27 聖母升天堂 (內湖天主堂) (114 台北市內湖區成功路三段 67 號)
 - ・ 28 耶穌聖心堂(成德天主堂) (115 台北市忠孝東路六段 114 號)
 - ・ 29 聖玫瑰堂 (南港天主堂) (115 台北市南港區研究院路一段 113 號)
 - ・ 30 耶穌君王堂(士林天主堂) (111 台北市士林區中正路 264 號)
 - ・ 31 天主之母堂 (天母天主堂) (111 台北市中山北路七段 171 號)
 - ・ 32 光啓耶穌會院 (106 台北市敦化南路一段 233 巷 20 號)
 - ・ 33 天主教台北總主教公署 (10679 台北市樂利路 94 號)
 - ・ (劍潭聖母聖心堂：111 台北市士林區承德路四段 1 巷 23 號。訪問時は既に使用されておらず、移転後のようであった。)
- 【台北市以外】
- ・ 34 徐匯耶穌會院 (併設：聖家堂會院及び徐匯高級中学校、247 台北縣蘆州鄉中山一路 1 號)
 - ・ 35 中華方濟省會院 (243 台北縣泰山鄉明志路三段 26 號)
 - ・ 36 本篤會尚義院(台北縣泰山鄉明志路三段 96 巷 1 號) (改装・造成中)
 - ・ 37 聖德蘭堂 (621 嘉義縣民雄鄉文化路 28-1 號)
 - ・ 38 聖母無原罪堂 (622 嘉義縣大林鎮東榮街 40 號)

- ・ 39 天主之母堂 (併設：竹崎天主堂聖嬰幼稚園、604 嘉義縣竹崎鄉民生路 6 號)
 - ・ 40 救世主堂 (616 嘉義縣新港鄉古民街 14 號)
 - ・ 41 聖若望主教座堂 (600 嘉義市民權路 62 號)
 - ・ 42 七苦聖母堂 (600 嘉義市民生北路 92 號)
 - ・ 43 嘉義市聖本篤會院 (600 嘉義市小雅路 545 號)
 - ・ 44 四湖道使會院及び文生中学 (併設：St. Vincent High School, 654 雲林縣四湖鄉中正路 268 號)
 - ・ 45 露德聖母堂 (654 雲林縣四湖鄉中山西路 95 號)
 - ・ 46 天上母后堂 (635 雲林縣東勢鄉東勢西路 87 號。廢墟。)
 - ・ 47 耶穌聖心堂 (632 雲林縣虎尾鎮北平路 77 號)
 - ・ 48 聖三堂 (630 雲林縣斗南鎮新興街 42 號)
 - ・ 49 聖玫瑰堂 (640 雲林縣斗六市中華路 80 號)
 - ・ 50 天上母后堂 (635 雲林縣東勢鄉東勢西路 87 號。廢墟。)
 - ・ 51 輔仁大學 (242 台北縣新莊市中正路 510 號)
 - ・ (52) 耶穌會院 613 嘉義縣朴子市文明路 19 號。住所地に所在していない。)
 - ・ (53) 中華聖母主教座堂：70047 台南市開山路 195 號。二〇〇五年に訪問。)
- (住所は実際に訪問当時に確認した場所。また、三年ごとに台湾で発行されている『台灣天主教手冊』(台灣地區主教團秘書處編譯、天主教教務協進會出版社、二〇〇四・二〇〇七・二〇一〇)も参照した。)

【参考資料】この報告の前稿にあたる「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察 (二)」に引き続き、『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』(輔神研究小組編著、光啓出版社、1995年)を訳出する。

〔現代語訳〕

二〇、我が家には仏教を信じる人がいて、死者の誕生日や命日、また中元普渡節には和尚さんに来てもらって法事を頼もうとするのですが、私はこれを拒絶するべきでしょうか。

【答】已に亡くなった親しい人に対して感謝と敬意を示す時には、個人がそれぞれの信仰する宗教の方式に従って示せば良いし、それが一人一人の持っている権利である。もし、家族の中で仏教を信仰して、和尚さんに頼んで法事してもらおうという人がいるのならば、私達はその考えを尊重しなければならない。

もし家族の人がカトリックを否定しないのであれば、私達は積極的に神父や信者仲間、家に来て死者のために祈りを捧げたり、供養したりしてもらうようにすると良い。また、家族の大多数の人が民間宗教を信仰して、カトリックを否定し排除しようとする時には、過大な衝突や、あなた自身が不孝者であるという家族の誤解と悪い噂が立つのを避けるために、このような時は(仕方なく)その法事に参加して、心の中で黙祷を捧げると良い。

このような状況下で他宗教の儀式に参加することは、あなたの「信仰の裏切り」を示すのではなくて、あなたの死者や家族に対する深い愛と尊重を示すことになるのである。

(以下、原文を節ごとに挿入する。原本(台湾)は繁体字であるが、できる範囲内で常用漢字になおしてある。)

《原文二〇、我家有人信仏、在亡者的生辰忌日・中元普渡節、會請和尚來作法事、我應該拒絕嗎？

【答】对已亡親人表達孝思、而用個人宗教信仰的方式表達、這是每一個家人的權利。如果家人信仏、而請和尚來作法事、我們應當尊重。如果家人並不排斥天主教、我們可以積極的請神父和教友到家裡來為亡者祈禱・獻祭。當家人大多數信仰民間宗教、排斥天主教時、為了避免過大的衝突、或使家人誤會自己不孝、立下惡表、此時可以參與、並在心中默禱。在這種情形下參與外教禮儀、並不表示自己背教、而是表達自己对亡者和家人一份深遠的愛與尊重。

二一、我が家の先祖のお墓(或いは遺骨)は、代々皆或るお寺の中にあるのですが、お墓参りの時はどの様にすれば良いでしょうか。

【答】もし、家族の人や若しくは他の仏教徒の人と一緒にお墓参りに行き、和尚さんがお経を読み上げる時、私達信者は心の中で自分たちの祈りを唱えればよい。

但し、もし家族全員が已にカトリックに改宗しており、しかし先祖のお墓を(お寺などから)遷せない場合には、皆でお墓の前に行って一緒に祈りを捧げさえすればそれでよい。もしお寺があなた達に代わってお墓を綺麗にしたり、管理してくれるならば、お寺側に相応の費用を払うのも、また当然のことである。

もし信者の家が新しいお墓を作るのならば、最も良い方法は公共の墓地に於いて、カトリックの方式に従ってすることである。この他に、教会には放置された遺骨等のために設けられた納骨堂などもあるから、それを利用することも出来る。

《原文二一、我家祖先之墳(或遺骨)、代代都在某寺廟中、掃墓時該怎樣做才好呢？

【答】若与家人或其他佛教徒一起去掃墓、在和尚誦經時、教友在心中做自己的祈禱。但是、若全家

都已改奉天主教，而祖墳尚不能遷移的話，諸位只要在墳前一起祈禱即可。若寺廟替你們整理照顧墓地，付給寺廟應得的酬勞，也是應當的。如果教友家庭作新墳墓，最好在公共墓地以天主教的方式去做。此外，教會也設有存放遺骨的納骨室可供使用。

二二、先祖を追念したり、死者のために祈りを捧げる時、死者が好きだった果物やお酒、若しくは他の物を献上することは出来ませんか。

【答】中国の伝統的な信仰に於いて、詰まる所礼儀とは何なのか。礼儀とは人が道理を折に触れて学び直したり、道德観念を養ったり教えたりする一種の儀式である。古代の人々も礼儀を通して皆に道德を修養することの大切さを教えていた。旧約聖書における礼儀の大多数も、神に対する尊敬を表わす礼儀である。当然その中には祈りを捧げる者が罪を購うためのものや救いの恩典を求めるといふ、違つた意味合いを持つたものも少なからず含まれている。であるからこのような疑問に的確に対応するために、私達はまず教会での道理について理解しておかなければならない。

私達は教会の道理の中で知っているが、人は息を引き取ると、すぐさま神の前に行き、神の裁きを受けなければならない。またこうも言える。物質世界との関係から離れると、もうそれからは食物やその他の物質に頼る必要もない。それが所謂「別の世界」の生命を維持することなのである。

一般的な春節における先祖を祀る儀式に於いて、生花や果物を供えることは、それなりに特別な意義はあるが、だからと言って先祖達がそれらの物品を受け取りに来られたことを示すものではない。礼儀の「本地化」の要素に基づいて、教会は信者達に、先人に向かつて生花や果物などを供えて、子孫の祖先に対する追慕の思いと敬意を表わすことを許可してはいるが、だからと言って、このことによつて教会が、奉納されたこれらの供物を先祖達が受け取りに来ていることを認めているというわけではない。

また、先祖を敬い祀ることは、私達後代の子孫が先祖の恩沢や徳義に思いを馳せたり、水の由つて来る源を思い、その根源である先祖を忘れていないことを示すための表現方式である。当然その中には「慎終追遠（既出・第1項など参照）」の意識も含まれている。先人の徳沢に倣い、それによつて次の世代の倫理道德精神を培い育てるのである。

これらのことから、先祖の祭祀に於いてまず重んじられることは私達の誠意な

のであつて、私達がどのような物を供えるかや数量の多寡によつて測られるものではないということである。このようなすべての外面的な行為に於いて、最も重要なのは私達への先祖の思いや先祖が子孫に残そうとした良いお手本、つまり私達に学び続けるよう示したものを汲み取ることであり、先祖の偉大な精神を発揚することこそが重要なのである。

死者のために最も有益なのは、彼らのために祈りを捧げ、供養し、骨を折つて苦勞したり各種の善行を重ねることなのである。その他のことはすべて外面の形式的なことであつて、死者を助けることに有益な点は何もない。教会における「諸聖と善行を通じる」という道理が私達に教えてくれることは、これらはすべて先祖が救いの恩沢に預かるという「円満」、つまり天国に於いて永遠の幸福を享受するということ、を得るのに助けとなることである。その他のことは単なる形式に過ぎず、死者にとつて有益な点は何もない。

中国の伝統的な供物は、生肉や生魚などの生臭い物と精進料理などの二つに分けられる。生臭物としての供物には大三牲、三牲、小三牲、五牲等の区別がある。

精進料理などの供物としては、線香やろうそく、生花、果物、野菜とご飯、しらいただ米、お茶やお酒等である。教会としては、已に精進料理としての供物については適応しているが、生臭物の供物については、キリスト、つまり世の罪を除く子羊という捧げ物に代えることによつて、より高く引き上げるとしている。

《原文》 二二、紀念祖先或為亡者祈禱時，可以献上亡者喜歡的水果・酒類或其他東西嗎？

【答】在中国傳統的信仰中，禮儀究竟是什麼呢？禮儀是為幫助人溫習道理，培養並教授道德的一種儀式。古時候的人也藉著禮儀，讓大眾了解修養道德的重要。在舊約的禮儀中，絕大多數是用於對天主的敬禮。當然其中就含有不少奉獻者的贖罪或感恩的不同意向在內。因此針對這類疑問，我們就先了解教會的道理。我們在教會的道理中知道，人一斷了氣，便須面對天主，接受天主的賞罰。也就是說，與物質界脫離了關係，因此便已不須再依賴食物或其他物質，來維持所謂「另一世界」的生命。

而一般在春節祭祖時，供奉鮮花・素果，則有其特別的意義，並非表示祖先們可來享受這些物品。基於禮儀本地化的因素，教會許可教友向先人献上鮮花・素果等，來表示子孫對祖先的追思與敬意。但不可因此認為教會認同這些奉獻的祭品，可供祖先們來享用。再者，祭拜祖先是表示我們後代子孫緬懷祖先德澤・飲水思源，不忘其本的表现。當然更有慎終追遠的意思在內。效法先人的德表，藉此培育下一代倫理道德的精神。因此，祭拜祖先首先重在我們的誠意，並不在於我們用什麼供品或數量的多少來界定。這一切的外在行動中，最重要的是我們應了解祖先的精神及留給後代子孫的好表樣，讓我們來繼續學習並發揚光大精神才是重要。為亡者最有助益的是為他們祈禱、獻祭、行刻苦及做各

種善功。其他的只是外在形式，無法助亡者得到益處。教會諸聖相通功的道理告訴我們，這些都可助祖先得到救恩的圓滿，享受天堂永福。其他的只是外在形式，無法助亡者得到益處。中國傳統的祭品分為董與素的兩種，董祭祭品有大三牲・三牲・小三牲・五牲等區別。素祭祭品為香・花・果・菜・飯・粟・茶酒等。教會已對素祭祭品作適應，對董祭祭品，須以基督一除免世界的羔羊祭品作為提昇。

二三、法壇を設置することに對して、教會としての見方はどの様なものですか。
【答】 中国人が先祖を敬うことは、悠久の歴史を持ち且つ良い伝統である。教會に於いても信者達に常に先人のために祈ることを勧めている。

家の中に「先祖の位牌」を祀る法壇を設置するのは、家族が祈りを捧げる場所という一つの象徴に過ぎず、特に差し支えはない。ただ、先祖を供養するための法壇（祭壇）を設置する時には、簡素質朴であるべきで、キリストの信仰と合わない一切の像や飾りを排除し、代わりに十字架に磔にされるイエス像か或いは教會の（発行している）図像を設置するべきである。

その他に用いる品として、酒杯や香台、ろうそくなどは、一般的にそれらを販売する店で購入して良い。購入する時には、他宗教の図像を意識させる要素を帯びていない器物であれば用いて良い。

先祖の位牌を作る時には、正確且つ儀礼の規則に則った位牌を作るよう心がけるべきである。例えば、誰々の第何代の物、或いは位牌、であるというように。私達が信仰する神は三位一体の神であるから、先祖の位牌に何か書き付ける時は、「神位」等の文字を書くことは避けるようにしなければならない。位牌は単に先祖を代表させる一種の象徴物であり、靈魂がその位牌に宿っていることを示すものではない。この点について信者が明確に理解してこそ、誤解や信仰への偏見や差別を生まないように出来るのである。

《原文》二三、對於設置供壇，教會的看法如何呢？

【答】 中国人敬祖是一個悠久而且好的傳統。在教會中也勸信友們要常為先人祈禱。

在家中設置「祖先牌位」的供壇，只是家庭祈禱場所的一個象徵而已，並無不可。只是在設置祖先供壇時，應求簡樸，去除一些互基督信仰不合的像飾，而改用十字架苦像或教會圖樣等來裝飾擺設。而其他的用品如酒杯・香爐・燭等，可至一般香燭店購買便可。選購時，只要不帶有外教圖像的器物皆可使用。在刻製祖先牌位時，應刻製正確且合乎禮規的牌位，如刻製某氏列祖列宗之位或牌位。由於我們所信仰的神是三位一体的天主，故書寫祖先牌位時，要避免寫「神位」的字樣。牌位只是代表祖先的一種象徵物，並非表示其靈魂就附在牌位上。此点信友應清楚明白，才不致造成誤解，有了

信仰的偏差。

二四、カトリックには死者のためだけの祈禱文や儀礼はありますか。

【答】 カトリックの教會では、死者のためだけに特別な祈禱文もある。また次のような死者のための短い祈りもある。「すべての信者の靈魂が、神の慈愛によつて安息を得られますように。アーメン。」他にも聖歌の中にも死者のための祈りの章節がある。（聖歌第一一九番）

善い行いをする時や、祈りを捧げる時に重要なのは心持ちであり、誠心誠意からの短い祈りこそを神は喜んで受け入れてくださるのである。以上、このようなミサで専門に用いられる祈禱文、或いは一般的な死者のための祈禱文や靈魂を鍛える祈禱文、短い祈り、これらはすべて良い参考になる。

信者達は自由に、心から、死者のために祈りを捧げられるのであり、これが死者やその家族や友人の求めに沿うものなのである。あなたもまた同じように自分の気持ちに従つて、死者のために一編の良いと思われる祈禱文を用いて祈つたり、先祖の功徳のためにそれぞれが祈りを捧げるのを妨げられることはない。

《原文》二四、天主教有没有專為亡者祈禱之類的經文或禮儀？

【答】 在天主教會中，有專為亡者所舉行的追思或殯葬的彌撒，其中就有專為亡者的特別祈禱文。也有為亡者的祈禱短誦：「凡諸信者靈魂，賴天主仁慈息止安所，聖孟！」選用聖詠「求為亡者祈禱的章節（聖詠二一九首）。」

行善功祈禱，重在心態，誠心誠意的短短代禱能蒙天主悅納。以上這些彌撒專用祈禱文、或一般為亡者的祈禱文・鍊靈禱文、短誦，都是很好的參考。信友也可以自由的誠心為亡者做祈禱，這將更符合亡者及其家人朋友的需要。您不妨也可自行？由內心為亡者做一篇好的祈禱文、為祖先做通功代禱。

《完》

【本稿作成において台湾師範大学の藤井倫明氏・金培懿氏に特段の配慮を賜った。ここに、特に記して謝意を表したい。】

・本報告は、文部科学省科学研究費補助「若手研究（B）」（研究課題番号19720011「東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響・儒教規範に基づく家族規範を中心に」2008～2010年度）による研究成果の一部である。

（二〇一一年十一月七日 受理）